

## 大志発電所跡探訪記

令和2年(2020年)8月24日、本会会員小柴茂氏、二瓶辰右衛門氏、事務局長小栗文夫氏と共に、兼ねてより定例会でも懸案であった金山町大志地区にあったという大志発電所跡を訪ねた。この日は良く晴れ、空に秋声の色を感じつつも残暑厳しい日であった。

辰右衛門氏の車でJR只見線会津中川駅まで行き、そこで落ち合った中川地区在住、星徹氏(元金山町職員)と、星氏の知己である大志在住、中丸吉之助氏(元国鉄職員)両氏の案内で大志地区の東部山あいまで車を進めた。そこから星氏の軽トラックに乗せてもらい数百メートル進む。ここがその跡と示されても、背丈にも迫る夏草の茂みに覆われ、その痕跡はほとんど認めることはできなかった。排水口であると指さされた場所が、少し窪んでいる程度で判然としない。雪解け直後の頃であれば、石垣等の構築物や導水管敷設跡も確認できるそう。

大志発電所は、御蔵入電気株式会社の施設として大正15年(昭和元年)に開業され、この地区に初めて電灯の光を灯したが、水量が不安定で管理が大変だったそうである。発電所近傍には職員の住宅もあった。戦後(昭和20年)は、国策により東北電力に編入されたが、最後の職員の定年退職後は、常駐管理者もなく、とうとう発電機の過熱が原因で火災に見舞われたとの事である。その後、昭和

26年(1951年)廃止に至った。平成に入り、金山町が地域の資源としてこの発電所の復活を計画したが、当時の法的・経済的・社会的条件が整わず沙汰止みとなった。それ以降、復活の動きはない。当時の調査計画等の資料は金山町役場に保存されている。

この発電所は、大志地区、中川地区の用水として開設された木冷堰の流れを利用して作られたものである。元々、中川、大志地区には土地はあっても利用できる水がなく水田が作れなかった。これを

憂いた先人たちが血のにじむような苦勞をして、一山越えた木冷沢の水を引いた(江戸末期)のが木冷堰である。1400mにも及ぶ洞門(トンネル)を、ノミや金槌程度の全くの人力で掘るといふ大事業を成し遂げた先人の意思と行動力の偉大さには誠に首を垂れる他ない。

木冷堰なくして大志発電所はなかったのである。木冷堰については金山町の重要な史実として調査研究されている。さらに、地元小学校の副読本にも取り上げられ、子どもの



Fig.1 発電所跡 地図上で場所の確認をする  
奥の2人が星氏、中丸氏



Fig.2 発電所近くの用水路 ここから取水口に続く道が奥へ延びる

教育に使われている。また、金山町出身の元本研究会理事加藤紘一氏が出版された絵本「この水を求めて 掘り抜き堰水路の開削」（2020年）の中で紹介されている。

さて、この発電所の取水口はどうであろう。これも星・中丸両氏が案内してくれた。木冷堰の出口に近いところにあるが、発電所跡から直接山中を辿ることは出来ないので、車で迂回移動する。国道252号を中川地区まで戻り、沼沢に至る県道を登る。ここでも途中から星氏の軽トラックに乗せてもらい木冷堰の出口まで連れて行っていただいた。

木冷堰の出口にはかなり広い場所があり、伊東正義氏（元衆議院議員、副総理）の揮毫した記念碑が立っている。老朽化した旧堰に変わり隣に新たな木冷堰が作られている（1994年）。写真ではわかりにくいですが、新堰は、高さが約1.6mあり中を歩くこともできるそうだ。途中で旧堰と出会う場所があるという。機会があれば是非入り、堰の入口にも行ってみたいものだ。



Fig. 3 木冷堰広場  
左手が堰出口右奥が記念碑



Fig. 4 木冷堰出口 「木冷隧道」の文字が見える

堰から流れ出る水は、渇水期の夏でもかなり豊富で、冷たい。堰の出口付近には、この水によって冷やされた外気が霧を発生させていた。水は、中川地区、大志地区それぞれに6:4の比で分水されている。大志側に分水された水が大志発電所へと流下する。水は沈砂池を経由して圧力管に導かれるので、その付近まで案内してもらった。

茫々たる草を掻き分けて50m位進む。足元がやや柔らかく沈み込んだ場所に出る。沈砂池跡である。沈砂池は、堰改修の折に埋められたそうである。圧力管を通した跡とみられる窪地は確認できたが、その入り口は確認できなかった。

発電所跡と取水口との標高差は地図上では100m余あり、木冷堰から出る水を全て発電に用いれば500kw程度の発電出力が期待できる。中川地区は大志発電所より低い標高にあるので、灌漑用水としては発電後の水を送ることができるであろう。



Fig. 5 奥が新堰 左手前は旧堰出口  
写真手前で左（中川）、右（大志）に分流される

研究会では“幻の発電所“と思っていた発電所が、多くの方のご協力で、その形は留めないものの存在した場所や朧げな姿が見えてきた。案内をして下さった星、中丸両氏はことのほか熱い思いをもって説明して下さいました。今回、突然の私たちの申し入れに対しても、誠に親切に丁寧に対応して下さいました。心から感謝申し上げます。青々とした稲穂を見る両氏の目には、故郷に誇りを持った偉人の姿が映っていた。

大志発電所を遺跡として歴史に留めておくのか、あるいは現役復活を期するのか。我々には木冷堰掘削の偉業を成し遂げた先人達の影がチラチラ見えてくるのである。

2020年8月25日

文責 二瓶 厚 (NPO 法人会津みしま自然エネルギー研究会)